

## 北野博美の大正時代

セクソロジスト

——折口信夫への遥けき道程⑤

内 海 宏 隆

### 10 千加との別離【大正十四年】

また「鳶魚日記」に戻り『北野』の足跡を追っていきこつ。

「二月六日 ○八重を俱して北野博美氏を訪ふ、往路だけ散策の積りにてブラブラ、夜になりて帰りがけ神楽坂。」「二月十三日 ○北野博美氏夜になりて来る、鳶魚随筆原稿頼

む」「一月十七日 ○北野氏へ整理を頼みたる分今日までの約束なるに來らず。」「一月十九日 ○夜北野氏感冒のよし、鈴木恵一代り写し物持参。残りは明日妻女持参といふ。」「二月二十日 ○北野氏より使价あり、感冒より余病を惹越し数日は就瘳すべしといふ、写し物少々持参、因て残れるは多からねば原書を返付あれと告げ、直に八重に写さしむ。」「一月二十一日 北野氏妻女写し物持参、借おきたる写本一冊返す。」「二月十日 八重を北野氏へ遣し、例の写真手を頼む。○北野氏チフスのよし、今日入院といふ。」

九日 北野露香。」「七月九日 北野博美氏。」「七月十三日 ○北野氏、先日頼みたる実麗卿日記三冊、文政十一、弘化元、明治六年三冊借り受、持参。」「七月十六日 ○北野露香女。」「八月九日 北野来り、夫婦別れしたりといふ、近所の明屋の二階を借り引越させることとせり、明後日移住の筈。」「大正十四年八月九日、《北野博美》32歳、広瀬千香28歳にて離婚。離婚の原因については周辺の人・斎藤昌三がこう語る。」「正直に見て、彼は一家を持続して行くだけの、生活能力がなかつた。(中略)：折角妻君の里から買つて貰つた目白の家も、売つては買戻されること再三だつたらしく、妻君持参のものも再三再四、七ツ屋へ往返したらしかつたのは、彼の無能力と人知れぬ虚栄があつたのだ。／それやこれやで、結局どっちから話が出たものか、大正の末年には子供を一切夫人に任して離縁となつた。」(前出・36人の好色家) 広瀬千香自身の言は第7項で紹介したとおり。離婚後の《北野》はまるで目の前の辛い現実から逃避せんがためか猛烈な勢いで鳶魚の仕事のサポートにのめりこんでいる。

「八月十一日 ○石原より断あり、別に自転車屋の二階を借りて今宵北野氏引越す、一會へとの話もありしが借問の方に決着す。」「八月十二日 ○北野氏校正を応援す、昨日の分も今日併送す。」「八月十三日 ○北野氏校正手伝。」「八月十四日 ○北野氏を頼み、三村氏へ阿漕塚の絵葉書を借来る。」「八月十五日 北野氏を頼みて、武田信賢老人へ股立の事を聞きにやる。返し股立くり股立。」「八月十六日 ○北野氏校正。」「八月十七日 ○北野氏は昨夜一宿、今朝市役所行を頼み出掛ける。」「八月十八日 ○御府内往還沿革図に、建築物の書入なきため、北野氏の出勤は徒勞。」「八月十九日 ○北野氏校正手伝。」「八月二十日 ○北野氏校正手伝。」「八月二十一日 ○北野氏校正手伝。」「八月二十二日 ○北野氏不加減にて校正手伝少々して帰る。」「八月二十三日 ○北野氏校正手伝。」「八月二十四日 ○北野氏校正手伝。」「八月二十六日 ○北野氏校正手伝。」「八月二十七日

《北野》はこの年一月中旬より体調を崩し、感冒からチフスを併発して倒れたことが「鳶魚日記」より分かる。これ以来四カ月「鳶魚日記」に《北野》の名前を見ることはなくなる。

「六月六日 ○北野博美氏、病氣後初めて来る。」「六月十三日 ○北野千香女来り、博美氏京都行のよし話あり。」「六月二十日 北野博美氏を訪ひ、吉田書店に往く。」「六月二十

日 ○北野氏校正手伝。「八月二十八日 ○北野氏を矢尾板博士に派し、其先代三印の書状写取方交渉。」「八月二十九日 ○北野氏。」「八月三十一日 北野氏校正手伝。」「九月一日 ○昼過より腹痛覚ゆ、近所の医師を招く、大腸カタルといふ、北野氏馳せて大村医師の来診を求む、先づ先づ調薬すべしとて七包持帰る、これで快ならずは云々と返事す。○北野氏帰家せず、己れの病を護る。○此日午前、北野氏を武田信賢氏に遣す。」「九月三日 ○北野氏、今夜泊。○山田氏との約束により北野氏を同氏に至らしむ。」「九月四日 ○北野氏夕刻帰寓。」

八月はほぼ連日鳶魚の手伝いにおもむいてゐる。目を引くのは九月初旬鳶魚が大腸カタルに冒されたときのこと。《北野》は鳶魚のために医師を呼びに走ったり、泊まりがけの看病をしたりと実に献身的な態度を見せている。

「九月五日 ○明日、外語短艇選手終日浄業有之候筈ゆゑ、北野氏参加により、今給藜生

に送らせて一九会に往く、流会になりたるて戻り来る。」「九月七日 ○北野氏。」「九月八日 ○夜、八重、隣娘、北野氏と仲店普請中の浅草を見に往く。」「九月十三日 ○北野氏を頼み、先借実麗卿日記三冊を橋本家へ返し、更に天保八年より十四年までの日記七冊借入、又同氏くり袴立のことにつき静方氏に往く。」「九月十六日 ○夕刻より、蓮玉庵へ蕎麦喰ひに往く、北野氏、八重俱。」「九月十九日 ○北野氏と集古会に往く、帰りは林鶴岡氏と四人になる。」「九月二十六日 大学新聞の依頼により、赤門の話を、北野氏に口授し、速達便に付す。」「九月二十八日 ○北野氏は山田氏へ手伝に。」「九月二十九日 ○北野氏は山田氏へ。」「十月一日 ○北野氏は手伝に往く。」「十月六日 ○北野氏来らず。」「十月二十五日 ○八重、北野氏と国学院大学に往き、幸若舞見物。」

「鳶魚日記」の中に《北野》が民俗芸能を見学に行く様子は今までも二度ほど出てきた。(大正12年5月5日府中「鬮祭」、13年6月16日「増上寺車人形」折口の影響(との

関係)の有無はともかくとして《北野》がこの時期民俗芸能に対して興味関心を持っていたことに着目しておきたい。国学院で幸若舞がどのような形で催されたのか(構内の場所・主催者・演者・演目など)全く不明。ちなみにこの年の十月、日本青年館の開設記念行事として「郷土舞踊と民謡」の会が開催された。のちに《北野》はこの会の企画・推進者となるのだが、この時点で参画している気配は「鳶魚日記」の中からは伺えない。最低限言えることは《北野》と国学院との接点をとここに見出せるということである。

「十一月十二日 ○北野氏に口述したる、炭焼の八王子を一閱す。」「十一月十六日 ○北野氏に頼み、橋本家へ前借の実麗卿日記七冊を返済し、其続き弘化元年より四年まで四冊借入。」「十一月二十日 ○山田清作氏、北野氏手伝を断りに。」「十一月二十三日四日ほど来ざりし北野氏見え少々話して帰る。」「十二月三十一日 ○久々にて北野生。」

「九月二十八日」以降《北野》は山田清作

- の手伝の方に回されている。「十一月二十日」に何があったのかは不明だが、山田は《北野》のサポートを断ってきている。そのせい  
か、それ以降《北野》の足は鳶魚の方へ向かなくなっている。この年の大晦日、それから約一カ月ぶりに鳶魚を訪れた《北野》はどんな話をしたのか。この一年、特に離婚ののち鳶魚に受けた数々の恩義を謝しに現れたのか。あるいは他の用件があったのか。はっきりしない。確かなことは大正十四年の大晦日を境にして《北野》は「鳶魚日記」からしばらくの間姿を消すことになるということだ。
- ◆
- ここで《北野博美》の最初の妻、広瀬千香について現在わかっている範囲でまとめておこうと思う。広瀬千香著「山中共古ノート」の中から《北野》との結婚生活について直接語られたところは一箇所もない。また彼女自身の人生について述べられた箇所も極めて少ない。その他諸々の資料の断片をつなぎあわせて年譜仕立てにしてみよう。
- ◆ 広瀬千香年譜(抄)
- 明治三〇年六月十六日 0
- 山梨県甲府市の生絲繭商広瀬鶴五郎の娘として生まれる。  
明治四四、五年ころ 14・15?  
日本基督教会派・山梨教会の牧師鷺津貞二郎(永井荷風実弟)から受洗する。  
明治四五年 15  
山梨県立高等女学校に入学。  
大正五年春 19  
北野博美と結婚し上京する。  
大正八年九月 22  
夫とともに性之研究會を興し雑誌「性之研究」を刊行(雑誌刊行は十二月)。筆名はつゆ香。  
菅原教造の編集する女性雑誌「女性日本人」に寄稿。  
大正十二年 26  
山中共古と出会う。  
大正十四年八月 28  
北野博美と離婚する。  
吉野作造・尾佐竹博士・宮武外骨らが中心となっていた明治文化研究会を齋藤昌三に連れられて傍聴する。  
昭和六年 34  
昭和七年 35  
「○広瀬ちか。」『鳶魚日記』(十月三日)  
「○広瀬露香、蚊帳を売りに来る、飛んだ時分に。」『鳶魚日記』(十二月二十八日)  
昭和九年 37  
随筆雑誌「山脈」を企画。  
「○広瀬ちか、舞台社佐久間真一。」『鳶魚日記』(五月八日)  
「広瀬ちか、午前十一時より午後三時まで話し込む。」『鳶魚日記』(八月二十二日)  
この年、永井荷風と知り合う。(断腸亭日乗)昭和九・八・二六に広瀬千香の名前は初出)  
昭和十年代  
出版社・青燈社を興し永井荷風『机辺之記』竹久夢二『九十九里へ』などの装幀を手掛ける。

昭和四八年

76

「山中共古ノート」第一集・第二集刊

行。

昭和五十年

78

「山中共古ノート」第三集刊行。

昭和七年の『鳶魚日記』の中に現れる千香女の姿はあまりにあわれである。暮れに蚊帳を売りに鳶魚の家を訪れたところなどから、この時期の彼女は経済的にかなり逼迫していたのだろうか。甲府の富家の出身で苦勞知らずの令嬢だったろう彼女が人生の辛酸を嘗めているようだ。実家からの援助は断たれてしまったのだろうか。また昭和九年八月二十二日の記事では「午前十一時より午後三時まで話し込」んだ様子が記されている。『鳶魚日記』には様々な人々の名前が日々登場し、日頃から来客の多い家だったことがわかるが、滞在した時間までが記されている例というのは非常に稀である。おそらくは、この月に発行された「山脈」に鳶魚が「甲府新聞放浪時代」を寄稿したことに由来する訪問だったのだろう。ともかく広瀬千香はそれきり『鳶魚日記』から姿を消し、以来荷風の「断腸亭日

乗」に頻繁に顔を見せることになる。

「…『昌三—ちか—荷風』の一篇のごときは、『近代文壇艶話』の特種である。そのおちかさんが瘦身を喪服に引きしめ、告別式の二時間あまりを、身じろぎもせず、じつと伏眼がちに腰かけていた姿を、遠くからわたしは見守っていた。トップ屋さんにでもつかまつたら一大事である。帰りの電車の中でも、吊皮にぶらさがりながら、庄司さんとその話をした。／早速スクープしようとして原稿を頼んだそうだが、『わたしの出る幕ではございません』と、ていよくはねられたとか。さもあろう。たんまり原稿料でも出してもらわないことには、わたしも書かない。」（本山桂川「昌三艶話」『はだかの昌三』昭和37）

「…千香女をめぐる裏ばなしの文壇艶話は、方程式で示せば昌三—千香—荷風となるのだ。残念ながらこのお披露目は時期尚早である。」

（坂本篤「少雨莊桃哉」『36人の好色家』昭和48）

これらの文から臆げながらも広瀬千香が恋多き女性であったことが想像されるのだが、真相ははっきりしない。（註13）ただ今の時点でも明確に言えることは、広瀬千香が荷風の「机邊の記」（昭和十一年四月三日・青燈社発行）の装幀を手掛けていること、それから「断腸亭日乗」の昭和九年—十三年にかけて「広瀬千香」の名前が数十回にわたって登場するということの二つである。（註14）

大正九年以来「秋田雨雀日記」よりの引用を忘れていた。以下数件「日記」中より《北野》の名を見つけることができる。

大正九年十二月二十五日

午後、京都で死んだ遠藤清子の告別式があった。（中略）中村吉蔵、平塚明子、北野夫妻、加藤一夫の諸君にあって。

ここで注目したいのは「遠藤清子の告別式」に北野夫妻と中村吉蔵とが同席しているということだ。このとき既に《北野》と中村に直接の関係があったかどうかは不明だが、中村はこの「民俗芸術の会」旗揚げの際

して小寺融吉・永田衡吉らとともに会の創始メンバーの一人となる人だ。もし中村と《北野》の間にこのとき既に面識(あるいはそれ

のきっかけについては慎重を期したい。) 大正十三年八月八日

北野夫妻が倶楽部のことで相談に来た。

野》の間にこのとき既に面識(あるいはそれなりのつきあい)があったとすれば《北野》の「民俗芸術の会」への加入ルートはこの中村ら早稲田側からと考えることもまた可能となる。《北野》は田中王堂や「早稲田大学人性道徳研究会」のメンバーら早稲田関係者と近しい間柄にあったことは確かだがそれが直接《北野》と「民俗芸術の会」の早稲田側メンバーとを結ぶ懸け橋になっていたかどうかというとはたして不明である。寧ろ小寺融吉・永田衡吉らとの関係性は「民俗芸術の会」発足後に生まれたものようであり、それ以前との関係性は極めて希薄であったと思われる。保坂達雄のように「早稲田グループの一人」として参加した可能性が高い」(『國文學—解釈と教材の研究—』97・1)と推定するのは如何なものだろう。一方で《北野》が「大正の末に(折口)先生について、民俗藝術の研究に没頭した」(註15)という発言もあり、国学院(折口)側からのルートもじゅうぶん考えられる。《北野》の「民俗芸術の会」加入

「倶楽部」とは何の略称なのだろう。「日記」の前後の記事から「倶楽部」なる言葉を拾うと坪内士行が関係していた「永楽倶楽部」、吉井勇、長田幹彦、楠山政雄、坪内士行、池田大伍(筆者注、池田弥三郎の叔父)河野、水谷竹紫らが参加メンバーの「早稲田倶楽部」などが見受けられるが、あるいはそれ以外の会合なのかもしれない。 大正十四年一月十七日

夜、北野家の先駆座(註15)の相談会

へいった。佐々木、佐藤、成島の諸君

が集った。仕事を積極的にすすめることに決心した。

大正十五年一月三日

夜、十年前の雑司谷の連中が集った。

佐藤、倉吉、北野の諸君。いい集り。

夜、戯曲を読みつづけた。

北野晃氏によれば鶉山にあった北野の屋敷

は劇団の稽古場としても使われていたそうだ。

「みんな科白覚えが悪くて、一番最初に科白

を覚えてしまったのは子供のわたしだったそうです。」と晃氏は当時を回顧する。北野は

自身役者の道を断念した後もこうして芸能・劇団関係者との繋がりを保った。北野の半生

をこうして顧みてつくづく感心することは、彼が人びととの絆をととても大切にし続け、そして人々との関係性の中で自らの活路を切り拓いていったということである。後年「郷土芸能と民謡の会」を主催する際にこうした芸能・劇団関係者との繋がりはなんらかの

たちで活かされていったものと思われる。

11 謎の一年間【大正十五年／昭和元年】

大正十五年に入ると《北野》は「鳶魚日記」からぱったり姿を消してしまう。次に彼

が「日記」に登場するのは昭和三年五月のことである。この著しい撤退は何を意味するの

か。即これが折口信夫への急激な接近を意味するの

わりあいは大正十四年の暮れまではしつかりと続いてきたのだ。(例えば大正十一年秋「万葉集三十回講座」の開講とともに)踵を返すようにして折口へと身を寄せていったとはちよつと思えない。



国会図書館には《北野》が會て少なからずかわりをもつた中村古峽主宰の雑誌「變態心理」の大正十五年三月十月(第一七卷三号〜一八卷四号)が所蔵されている。慶応義塾大学図書館で閲覧させていただいたのは大正十年までのものであったから、万が一《北野》にとつて空白の多い年(『大正十五年』のプランクをいくらかでも埋められたらと思つて参考までに資料請求を試みた。意外にも《北野》は古巢に戻り、この雑誌の編集業務に再びついていた。

此の春、私は私が再び本誌に筆を執るやうになつたとき、自らそれを「放蕩息子の歸宅」といつた。私にとつて本誌は字義通り十年の知己である。しかし私が多少でも本誌の爲めになすところあつたと自負し得るのは第

三卷、四卷、五卷、六卷の極めて短い期間に過ぎない。而も甚だ微力であつた。(中略)現在の私は直接本誌の編輯業務にたづさはてはるない。私の本會に於ける仕事は尚ほ他にある。編輯事務には私などよりも遙かに熱心と思われる野村君があるのだけれども、尚ほ私としては、多少なりとも野村君を援けて本誌の今後に盡すところがありたいとの願ひを持つてゐる。嘗て私は、本誌を離れてからの數年間に於て種々なことを経験して來た。今にして思へば、それはすべてヤコブが石の枕であつたと考へられる。とも角も私は再び本誌に戻つて來たのである。恐らく私の今後は本誌と共に終始するであらう。讀者の愛を一身に集めたいのが、今の私の唯一の願ひである。(博美「放蕩息子歸宅の辯」『變態心理』第十八卷第一號 大正十五年七月)

ウハウの応用編であり、中村古峽より暖廉分けを許された兄弟誌といつても過言ではなからう。「性之研究」の失敗の後(ある意味では成功ののち)「捨てる神あらば拾う神あり」で、力がありながらも官憲に押し潰された氣の毒な《北野》を認め、迎えて入れてくれたのは旧師・中村古峽であつた。旧師の御恩に報いるべく「直接本誌の編輯業務にたづさは」らなくとも精力的に活動をしている。たとえば四月号目次を見ると「種々なる羞恥の表現」「靈媒による『物品引寄』實驗會を監視するの記」の二本を掲載、中をめくると三月十四日「變態心理」談話會にて「世相に觀る」と題した講演をしたこと、四月十八日には「婦人講座」で「女性は斯くある」という表題の講座をもつ予定であることが伺える。「世相に觀る」では「現代の都市中心主義は建設時代で、徳川時代にこれを求むれば明和安永の時代に似、その奢侈の傾向は文化文政時代に似てゐることを、約一時間に亘つて述べられ」という報告があり、話の内容から三田村鳶魚の影響が感じられる。翌月も「種々なる羞恥の表現」「現代へのカンフル注

射」「新らしい神の出現」と三本の論稿を寄せており、また「婦人研究部設立に就いて」という宣伝ページからは「日本精神醫學會婦人研究部主事」なる役職を任されていることが分かる。「五月談話會豫告」からは五月九日に「吉原に就いて」と題する談話をすることが予告されている。これも鳶魚の影響が感じられる題目である。この号に出ている「日本精神醫學會發行書目録」宣伝から「變態性欲講義」なる著作を《北野》が刊行していることも知られる。(大正11年刊。日本變態心理学会。「變態心理」大正9・1・9に連載した「變態性欲研究」を整理し一冊にまとめたもの。これも北野の「性之研究敗亡」に同情した中村古峽からの援護射撃と思われる。) また「編輯後記」には「吾等は今いろいろに改造期に面してゐる。診療部も出版部も。本誌の大飛躍がとりも直さず本會の大發展であることを如實に示めさうがために。(H)」とあることからマンネリズムに陥った「變態心理」のありかたを刷新しようという《北野》のポジティブな姿勢がうかがわれる。先に触れた「日本精神醫學會婦人研究部」設立もその事業の一環なのであろう。しかしなぜか九月号「編輯後記」には「：私は本年一月以降再び本會の人となりました。従つて本誌の編輯上に就いては、今日まで相談も受け、多少の提案も致して来たのであります。しかし今後の私は、單に一個の寄稿家としてのみ諸君に見えるのでありませう。」とネガティブな姿勢の物言いに変わっている。そして十月号「編輯を了へて」では「先月號限り編輯事務には一切關係しない筈だつた私が、必要とあつて再び召された次第である。」と再び「變態心理」内部にかかわりをもつたことを告げている。しかし「編輯にはまだ工夫すべき點が多々あるとは知つてゐるが何にしても暇がない。五月以來の僕はまるで雑用とのマラソンを續けて来たやうなもの。(中略)其の何の故であるかは今にお判りになるであらう。吾等もその日を待つてゐる」と語る。何事に忙しいのか具体的に書かれていないが八月号「編輯後記」にも「書けばまだ書きたいことがある、だがもう時間がない。一時間と三十分の後には東京驛から大阪下りをやらねばならぬ。」「實は此の二ヶ月間といふものは、まるで一時間と續けて机に向つたことがない。」とも言っている。《北野》が一体この間になにかかわりをもってどんな行動をとつたのか具体的なことは何一つわからない。即これが折口信夫への急激な接近を意味しないまでも《北野》の内部で「陣痛」が始まっていたことは否定できまい。(尚「變態心理」は大正十五年十月号をもって休刊となつている。「編輯後記」に見た揺れ動く《北野》の言動と「變態心理」突然の休刊にはどの程度相関関係があるのだろうか。)

(前略) 北野博美という變態心理の研究をしていた人がいて、それ以前にその方面の著作を出して、翻訳などもしていたが、変わった人で、エロチックなことを専門にしていた。この人がだんだん変わつてきて、われと付き合うようになった。フオークロア畑へ出てきて、雑誌「民俗芸術」を出すことになった。小寺融吉氏(中略)が、仕事の緻密にできる人で、二人で雑誌を經營した。小寺さんは戦争中に、北野さんは戦後に死んだ。柳田先生の学問を知つて、同感してゆく者は

少ない。末梢的に触れてゆく人が多いのだが、新しい学問は、そんな点で人が寄ってきて、本領に入るのだ。この二人のしごとは、誰にでも同感できる。地方の物好きが同感するのでも、本屋も力を入れた。芸能の歴史、明治の末から昭和初年の状態はこの本について見る必要がある。（「折口信夫全集」ノート編追補第三卷「六 雪祭り・花祭りの研究」二七四頁）

早川さんが、新野の祭りと、山一つこつちの設楽の花祭りと、一緒に見られるかもしれない、新野の祭りと日を接している、それを見ようと言うので行つたのだが、両方見る計画だった。そして両方を見て満足した。どこで祭りを見てもレパートリーがたくさんあり、それを一貫する一つの組織が出来そうに思えた。それまで芸能的な祭りを見たことがないので感激した。それから、こういうことをもつと組織的に研究してみたいと思つた。その時受けた印象を何度か話すうちに、心の中にも組織が浮かんできた。そのうち仲間ができた。小寺融吉・北野博美の二人が、気質は違

能史の講義を始めた翌年か翌々年くらいに「民俗芸術」を出そうということになった。それまで芸能研究をする人は、いきなりその中に躍り込み、ひとりではできないならやつてみようという形だった。芝居は容易でないが、三味線や歌うものはいっぺんに入つてしまふところが「民俗芸術」では客観的な立場に立ち、しかもそれをしてる人と同じ気持ちで眺めるという態度を立てようとした。その時分、実感が大事だということを言つた。実感主義だった。まず見て回らねば意味が無い、まず見て歩こうという考えが賛成され、波多（郁太郎）君・西角井（正慶）君などが出てきて、その雑誌を外から手助けした。本で調べることでも大事だが、それに肉付けをしてきた（「折口信夫全集」ノート編追補第三卷「七 芸能史の組織化へ」二八二頁）

その存在を認めていたことがわかる。（註17）「だんだん変わってきて、われわれと付き合うようになった。」そのうち仲間ができたというところから《北野》の折口への接近の仕方がわかる。《北野》の三田村鳶魚への接近のしかたも、既に見てきたように「だんだん」「そのうち」といったことばで表現されるような緩やかなものだった。陶祇が「綜合と發見の新學說」（『民俗芸術』昭和5・8）の中で語るように「文學の起源を、性の牽引や咄嗟の感激から出發したとする仮設の缺點を擧げて」新たに宗教起源説を提唱する折口にそれまで性の研究一辺倒でやってきた《北野》はカウンターパンチを喰らうような衝撃を受けたに違いない。それまで「変態心理の研究をしていた」「エロティックなことを専門にしていた」《北野》が興味の対象を次第にずらしてゆき（絞り込んでいき）焦点を「フォークロア畑」に合わせるにいった。それは一朝一夕に完了するようなことではなかつただろう。「只、悲しい哉、此方面には全く無知識であつた私などには、下世話に謂ふ猫に小判で、最初の一讀では、殆ど其半分も

うが、良い組み合わせで親しくしていた。芸

ていて、翻訳などもしていた」人として既に

猫に小判で、最初の一讀では、殆ど其半分も

訣らないでしまつた」「呪師を知り、猿楽を覚えて行く努力を積んでの読み返し、読み返すしとで、靡げながらも、そこに述べられてゐる事だけは、漸く理會が行くまでになつた、と今は思つてゐる」と語る陶祇(『北野』)の折口学受容に要した苦勞が忍ばれる。厳しい自己否定の上の軌道修正には数年間というそれなりの時間が必要だつたのだろう。筆者は『北野博美』における「大正末年／昭和元年」をそんな時期として受け止めておこうと思う。

## 12 まとめにかえて

最後に『北野博美』は折口のどんな点に魅かれたのか考えてみたい。結論から先に言えば①折口の性の問題に対する興味・関心・肯定的見解②折口の芸能に対する造詣の深さ③折口の人格の魅力の三点に『北野』は魅かれたのだと思う。

まず①だが、『北野博美』は性についての研究を長年続けてきた。われわれの見てきた限りでも「早稲田大学人性道德研究会」、中村古峯の「日本精神醫學會」／「變態心理」、そして自身の主宰する「性之研究会」「新性

社」と様々な団体で『北野』は性の問題を独自に探求してきた。こうした過程で性に対するアプローチの仕方が次第しだいに漠然としたものから鋭角化したものに変化してきたといふことは言えると思う。最初『北野』は生理学・精神医学・心理学・人類学・民族学・民俗学・宗教学・オカルティズム・社会学など多岐にわたる方面から性についての問題を取り扱っていたが、彼の興味の対象はだんだんと民俗学の方に絞られてきた。雑誌「性之研究」失敗について齋藤昌三は「内容が、性の問題から兎角民俗の方に流れがち」と指摘したが、これは『北野』の当時の指向性を示唆する言葉でもあると思う。「柳田先生の学問を知つて、同感してゆく者は少ない。末梢的に触れてゆく人が多いのだが、新しい学問は、そんな点で人が寄つてきて、本領に入る」と折口は語つたが、『北野』も性という「末梢的」な問題から「柳田先生の学問」＝民俗学に入つていったと思われる。

大正三年、二十七歳の折口信夫は大阪の文芸愛好家サークル「文芸同政会」で「暗黒世界における言語意識の進化(性欲篇)」なる講演を行つたり、「不二新聞」に「自讃歌」「口ぶえ」などの性的なモチーフの創作類を發表したりしている。これらは彼の人も若いころから性に対して並々ならぬ興味関心をもつていたことを示すものである。；異端にして反骨の人であつた南方熊楠や宮武外骨が、折口をして性欲的なものに強い関心を示す人達と称せられながらも、彼らの猥談を聞き、終生変わることのない好誼を持ち続けたのは、やはり折口自身が性あるいは性欲を人間の本質的なもの、文化に隠然たる影響を及ぼしているもの、と考えていたからであらう。(長谷川政春「評伝」『折口信夫事典』(註18))

『北野』は折口の「万葉集講座」「源氏全講会」などに出席するうちに、折口の考え方に自分とよく似た部分を発見したのであるまいか。「性あるいは性欲を人間の本質的なもの、文化に隠然たる影響を及ぼしているもの」と考える折口信夫に『北野』は強く共感したものと思われる。また「性的行事として

の盆踊り」「性と宗教」などの著書を折口との邂逅より以前に刊行している《北野》にとつてみれば折口の学問は己の限界を突き抜けたところに存在した革命的な方法論だったのではあるまいか。折口が性の問題を限定的に捉えずに、民俗全般の問題へと敷衍していったことはこの男にとつてみれば大きな衝撃だったろうと思われる。南方熊楠は《北野》にとつて「性之研究」時代に何度も寄稿してもらい交渉をもっている相手だ。学問的に熊楠と近いところに折口が位置していると知れば《北野》が折口に近づくのも当然のことかもしれない。特に大正十一年は折口と宮武・熊楠との接点の多い時期である。(大正10年11月 折口は宮武外骨開講の「赤門講座」の講師となつている。11年5月7日 南方熊楠に初対面。12月30日、宮武外骨に賭博関係の本の執筆を勧めている。)《北野》と折口を結びつける化学反応が起こらないとも限らない雰囲気は確かにこの時期にある。《北野》↓

秋田雨雀↓折口、《北野》↓山中共古↓折口、《北野》↓宮武外骨↓折口、《北野》↓南方熊楠↓折口、(また斎藤昌三の発言を信じるな

らば)《北野》↓武田祐吉↓折口などさまざまなるルートが考えられる。殊、性研究に絞つて考えるならばこのうち《北野》↓宮武↓折口、《北野》↓南方↓折口あたりが有力なルートとして考えられよう。

次に②だが、前述したように元来俳優志望だったと云われる《北野》が芸能に興味を持たぬはずがない。「性之研究」時代既に「盆踊り研究」なども手がけていた《北野》のこただから、民俗芸能への関心はもともあつたのだ。柳田の捨てた「芸能」を拾い上げて「民俗学」に組み入れたのは折口であるとい

一般によく言われるところだが、そんな折口の芸能に対する取り組みは《北野》を虜にしたものと思われ。これは結果論に過ぎぬかもしれないが、北野が後年「郷土舞踊と民謡の会」の企画・推進者として尽力したということは一度は舞台でスポットライトを浴びることを夢見た男の紆余曲折の末にたどり着いた《夢》の二次的実現とも考えられる。

③は副次的なものであるが、決して無視できぬところがあると思う。「鳶魚日記」に見てきた通り三田村鳶魚とのかかわりも決して

淡いものではなかったが、結局《北野》のその役割は下働きに終始していたようなところがあつた。また大正十四年の末には大野氏のところでトラヴルも起こしており、鳶魚との関係はすでにピークを過ぎていたものも思われる。折口の「感染教育」に罹つた多くの人々は事業の失敗・離婚など人生さまざまの辛苦を嘗めた中年男《北野博美》をきつと優しく迎え入れたことだったろう。《北野》が折口ばかりでなく、その高弟であった高崎正秀や西角井正慶などと生涯にわたり親しくしていたことは様々な文献から伺えるところである。(註19)

また《北野》自身が折口の「感染教育」に罹っていたことは彼の「民俗芸術」に寄せた数々の文章を読めば自ずと明らかになることだろう。大正九年、編集の労に耐えられずに『土俗と伝説』を四号で自然廃刊させたと云う折口自身、雑誌編集・運営のあり方がいかに困難を伴うものであるかは人一倍知るところだったと思われる。自らの主宰する純粹なる民俗学(それも芸能を中心とした)研究雑誌の刊行を折口は内心望んでいた。しかし国

学院・慶応義塾と二つの大学を兼務している上に歌人としての創作活動も行い多忙を極めた彼に代わって雑誌編集に携わってくれるような適当な影法師はなかなかおらなかった。

そこへ折口の講義をまとめてガリ版刷りの「ふおくろあ文庫」を刊行し、学生に配布するといったサーヴィスを行なう「変わった人」Ⅱ《北野》が現れた。(註20) 新聞記者・雑誌編集者としての長年のキャリア、独学とはいえっても十数年にわたる性研究者としての実績、「氣心のよ」さ、《北野》のそうしたよいものを折口はだれよりも的確に評価し拾い上げた。個人の資質を見抜いてその人の進むべき方向に導いてやる——仮にそれが教育者としての為事だとすれば折口信夫は《北野》にとつてまさに真の教育者であったといえよう。(了)

## 註

13 坪内祐三は「広瀬さんの『私の荷風記』正・続を讀むと、その噂が単なるデマだったことがわかる」と広瀬にまつわる醜聞を否定する。(共古目録と広瀬千香「思想の科学」一九九・五) 尚、

内海 北野博美の大正時代

14 広瀬の詳細については最近佐藤信子が「廣瀬千香伝」『甲斐路』(第93号 一九九・四)を著した。

平成八年八月九日、筆者は「山中共古ノート」の奥付けにある「青燈社」の住所「東京都中央区新富二一八二」を尋ねた。しかしそこは駐車場と化していた。近所の方に伺ったところ、昭和五十年当時そこは「日刊スポーツ新聞社」があったというので、今度はそちらをたずねた。既に昭和五十年当時を知る人はほとんど退職されていたが、記憶を辿るとそこには「日刊スポーツ新聞社」の子会社である「日刊スポーツ印刷社」があったとのこと。その四階に「青燈社」なる会社が入っていたという。ちなみにNTTの番号案内では東京都内で「青燈社」なる印刷会社の届けは出ていないとのことだった。同年九月二十日にひよんなことから北野博美/広瀬千香の長男・北野晃氏との会見が叶うことになった。(本文中処々「北野晃氏によれば……」とある箇所は会見の後に加筆等を施したところである。尚、本稿の第一稿は平成八年八月十六日の段階で一応の完成を見ていた。) その際坪内祐三・山口昌男のお二人のお仕事(「共古目録と広瀬千香」『思想の科学』一九九・五、「内田露庵の不思議 失われた日本発掘(十二)」『群像』一九九・五)が既にあることをご教示い

ただいた。筆者の「作業」と重なる点もあるが、お二人のお仕事の焦点がどちらかといえは《北野博美》よりも広瀬千香の方に置かれているので敢えてこのままのかたちで拙稿を発表させていただく次第である。一言お断りしておく。

15 西角井正慶「いた、いた歌」『短歌』(創刊号 昭和29・1)

16 「先駆座」とは佐々木孝丸・秋田雨雀らが興した劇団。《北野》は佐々木孝丸の關係した「文芸戦線」にも寄稿している。(「餘りに眞剣な話」大正14年7月号)

17 加藤守雄は「折口」先生に私淑していた北野博美さんなんかだつて、その方面(エロティシズム關係)の大家でしょう。はじめつから民俗学で知り合つたんじゃないと思う。」と推理する。(「芸能」昭和43・10) 《北野》の経歴を辿つてみてこの推理はまんざら間違ひではなからうと思われる。鈴木貞美は「折口の古代の神事の研究のうち、性が大きな関心事になっていることにも、(若野)

18 泡鳴の影が射しているのではないか」「大正期には、性欲を肯定する思想が盛んに行われ、エロスを神秘化する傾向も様ざまに見られる。『変態心理』という名で、異常心理学も流行した。折口が文体論で、神憑りした巫女の口調の乱れを鋭くついているのにも、こんな大正期の思潮が働いてい

## 若越郷土研究 四十四卷六号

るのではないか。」と折口のそうした傾向を大正時代の一思潮の反映として捉かえそうとしている。「親しみやすい」折口信夫全集「朝日新聞」95/3/26「読者」欄。また佐伯順子は「口ぶえ」が執筆されたのは大正二(一九一三)年のことであり、この年はまた、クラフト・エヒングの『性的精神病質』(原書一八八六年)が、『変態性欲心理』の題のもとに、翻訳、出版された年でもあった。この二年後には、『変態性欲論』(羽太鋭治・沢田順三郎)が出され、その後続々と、性研究雑誌や通俗性科学書が刊行されて、一九一〇年代から二〇年代にかけては、『通俗性欲学ブーム』(小田亮「性」)ともいえる現象が生じる。折口はこうして、従来、異常とも病気とも思われておらず、書生社会のなかで当然の風俗にすぎなかった男色が、『変態性欲』や『変態』という名のもとに、性的倒錯として困いこまれてゆく時期に立ち合った。」と語る。「折口信夫の女性観とセクシュアリティ」『折口信夫全集月報21』96・12)近年こうした時代のコンテクストの中で折口学の形成過程を捉えかえそうとする動きがある。拙稿もそうした試みのひとつである。

19 前出・西角井正慶「いたゞいた歌」には折口ファミリィの中での《北野》の姿を彷彿とさせる次のような記述がある。「風はやの熊野の鴉、むら鴉

とほくとはばず 浅間よりかへる(ソノハシアカ、リキ)」という歌をひいたあと「新和歌浦達 萊島巖窟の寫眞の一部を、ペンでカットして、ソノハシ赤カリキの主人公北野博美氏と、多分は私をも含めて諷刺されたものらしい。カットの岩のくばみが、信州安曇地方で先生が採集された木の股で作った、道祖神の女神のそれを連想せしめる。北野さんは昔、變態心理で名をなした人だが、大正の末から先生について、民俗藝術の研究に没頭した、私の先輩であり、先生も大へん目を懸けて親しまれた方。お酒のせるであらう。鼻が赤らんでみたので、「未摘花」その他の愛稱があり、鼻までは似てゐないが、その同族ともいふべき私へのお便りには、よく其に因んだ戯笑があつた。(中略)土肥の海 あまりにすみてうらさびし。北野の大人のはなを ふと思ふ／といつたのもある。何かにつけて心たのしい話題となつた、その北野さんが(中略)なくなり、先生の身邊も益々淋しくなつた(以下略)」

20 「対談『古代』の思考形式」『折口信夫全集月報』第三号(昭和47年7月)藤井貞文の発言。